

夜話 研究者出発の遠い遠い思い出話から ②

上田庄三郎研究を通して所属するようになった民間教育研究団体・教育運動史研究会〔今は無い〕が、わが国における「教育運動」の「掘り起こし」を進めていた。

上田の第一著書は、じつに、『教育戦線—教員組合の結成へ—』（自由社、昭和5年—1930年）。上田は同書において自らの身を「プロレタリアジャーナリズム」に置くと、宣言している。この書を何とか再度世に問えないかと考え、教育運動史研究会の井野川潔先生（故人）にその可能性を訊ねた。運動史研が重視していた「教育運動」は、新興教育研究所ならびに日本教育労働者組合のそれであり、上田は前者から除名処分を受けていることもあったのだろう、あまり乗り気のある「回答」はいただけなかった……。

ところが、予想もしていなかった方面から、上田庄三郎全集刊行の希望が語られていた。三井為友という当時東京都立大学教授で、社会教育分野の先生である（故人）。三井先生が、ぼくの上田に関する資料収集の話はどこからか聞きつけ、会いましょう、との手紙を下された、会う際には収集した資料を携えてきてほしい、と。

おびただしい数の著書の中から選んで数冊、それ以外に、大正期から戦前期に発表した、ガリ版刷りの論稿、教員であった最後の場茅ヶ崎の雑誌論稿、上田家からお借りしてコピーを取って製本しておいたノート（育児記録、教育記録など）などを、風呂敷に包んで帯同し、お目に掛かった。

お会いしぼくの大荷物姿を目に留めるや、先生は、「上田全集、出そう。出版社は国土社に依頼する。君がすべて構成編集をし解説原稿を書きなさい。いいね。」とおっしゃった。いいも、悪いもない。ただびっくりするだけ。1973年の夏過ぎであった（博士課程在学中）。

全8巻。解説原稿を添えて、三井先生にお渡ししたのはその年のクリスマスの日であった。国土社から「ゲラ」が送られてきたのは翌年の夏のこと。しかし、なかなか出版にはいたらず、いわゆるお蔵入りの状態となっていた。（すでに予告チラシは出されていたのだが）

世の中の「常識」には「つり合い」というものがあるのだ、と知らされた。「上田ごときが8巻本とは何事ぞ！」という強いクレームが出版社の方にあり、三井先生が相当粘ったけれど、結局は5巻本ならば、ということになった。上田の主著とぼくが思っていた『調べた綴方とその実践』を抜いて、「編者が大学院生ではなお都合が悪い」との声が社内に入り、ぼくが埼玉大学に職を得た1976年（昭和51年）から発行が進んでいった。そして、ぼくが最も力を入れた第1巻（大地に立つ教育）を最終（第5回）配本してすべてが終わったはずであった。

しかし上田を知る多くの人たちから、上田を生活綴り方運動成立期の立役者としてきちんと評価した著作集にすべきだ、という声が寄せられ、急ぎよ第6巻を仕上げ、月報に「傍流から主流へ—上田庄三郎を語る」と題した倉澤栄吉先生への聞き取りを収めた。

倉澤先生に始まり倉澤先生に終わるぼくのひとまとまりの、若い頃の研究側面史は、これで幕を下ろすことになる。